

低い支那で解かれた。……大正七年十月八日第一日行程。

文四 せつ 子

吾をせめ吾をなやむるおそろしき、くしき悪魔はわが心なり
ごまりたる時計と吾と剝製の小鳥のほかは何物もなし
不具な子を持ちたる母の心地しておのが心は吾をみつむる
まだ知らぬ清き世界を吾は見き物も覚えて病みてある時
世の中に残り、おのが足跡は小さけれども尊しと思ふ
かろやかに物も云ひ得ぬ子となりぬこのをのゝきにおそはれしより
あるかなき朝の風にもうちふるふ、アスハラカヌとおのが心と
世の中のすべての人が何となく吾がはらからの心地こそすれ
此れもよしあれもまたよし何物も皆よし今日の吾が

しばらくは目をとちてきく天地のなげきより來るこがらしの音

秋 咏

さふらん

旅にしてはや夕ぐれの山々も見つゝつかれて君をこそ思へ
遠旅のころかなしく夕暮のみしらぬ驛にともる火を見つ
今はやみちのく遠くはなれて見しらぬ驛にくれはてにけり
京もはや近づきにけりをち方の空にあかるくはゆるともし火
さら／＼と葉すれかすけくつきよみの光のかげにゆらく穗すゝき
つきよみの光にしるくわくら葉を風にならして立てる木のみゆ
ひる時雨はれにけらしなひさ方の空はほのかに白みそめつも
そろ／＼とたゝなはりつゝ五百重山夜の天のもとにもたしたるかも



心には

いつまでも一つの道をめぐり居る走馬燈見て吾を思ひぬ
みにくさをかさねていとも美しき物を思へるこの女かな
喜びも悲しびも皆わが胸の尊きたから人にもらさじ人間のなす事皆がふつゝかに思はるゝかな此頃の吾おのがみをめでたきものと思ふこと今宵始めて吾は知りけり
初冬の夕日の町を歩みゐる昔の友にふと逢ひにけり
湖
くもしろき大空のかけふか／＼とうつしてすめる山の湖
旅にして一人むかへば湖のとほくひろきも悲しかりけり
山かひの小さき沼に菱とりし乙女のわれはやすかりしかな
ひとり／＼したしき人とはなれゆくかなしみにゐてこがらしをきく

湖

しづ 枝